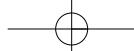


飛翔 第81号

〈目 次〉

○卷頭言	2
○研究室紹介	4
○特集1 総科「飛翔アーカイブス」 研究室紹介から生まれた名言集	15
○特集2 <i>Another Talk</i> 卓球部	18
○OB紹介	22
○REVIEW×REVIEW	25
○飛翔な日々	27
○卒論題目紹介	31
○人事異動のお知ら	35
○編集後記	36



卷頭言

卷頭言

言語の起源をめぐる
議論から

吉田光演
(現総合科学副研究科長)
(次期総合科学研究科長)

様々な科学の究極的総合をめざすものである。では、既存の個別科学の内側は旧態依然としたままなのかと言えば、逆である。学問における総合性は抗いがたい潮流であり、文系色の強い分野でも他の科学の成果を取り入れざるを得ない状況にある。

私の研究分野は言語学・ドイツ語学だが、それは元来文学研究に属し、一般言語、日本語学、英語学、独語学、仏語学など言語別に区切られていた。しかし、今日では心理学・人類学・情報学・脳科学・生物学といった分野との協同が進んでいる。そこには、二十世紀から現代へと科学的知見が蓄積することでのこれまで聖域であった領域についての問い合わせが真剣な研究テーマになってきたということが挙げられる。たとえば言語の起源について語ることは、かつては不可能だった。1866年に設立されたパリ言語学会は規約の中に言語の起源をテーマとする論文は受けつけないことを盛り込んだ。ル

ソーやヘルダーによる哲学的な言語起源論はあったが、科学的観察を重視する言語学では、人類言語の起源がどこにあるのかについて知る手段はなく、それを論ずるのは思弁に過ぎないとして禁止を宣言した。十八世紀末におけるサンスクリット語の再発見に端を発した十九世紀青年文法派らの歴史言語学の推進によって印欧祖語が再構築され、ヨーロッパとインドにまたがる広大な地域に一つの言語があつたことが音韻比較によって示された。印欧祖語から分かれる言語系統樹も提案された時代にあっても、文字の無い先史時代、さらに遡って人類誕生期の言語については、身振り原型説や音楽模倣説、労働起源説、さらには神によるアダムの命名起源説など、憶測や想像の氾濫に歯止めをかけるすべがなかつたのである。

しかし、ブローカが失語症患者の脳から大脳左半球のブローカ野を言語野として発見し、またウエルニケも別の

卷頭言

失語症に関するウエルニケ野を見つけ、次第に脳の部位に言語の能力が局在しているという認識が広がった。それをおいわば理論化したのが、チョムスキーによって一九五七年に提案された生成文法である。言語の背後には人間という種に固有の言語能力があり、脳内に組み込まれ普遍文法が発現する。この説は伝統言語学と伝統心理学からは批判されたが、認知科学の発展を促した。さらに、脳神経科学の発達と幼児の言語獲得研究によつて、言語の生得性の考えは次第に市民権を得るようになる。

ヒトの系統進化、脳容量の拡大、发声器官の形成、言語遺伝子の発見（FOX P2）など、言語学以外での人類学や遺伝子研究の進展によつて、人類を特徴づける言語の獲得シナリオについて科学的議論が可能になった。チンパンジーと人類の共通祖先は約六百万年前に出現したと考えられており、言語の痕跡もそれ以後のどこかに見いだ

せるはずだ。ただし、ホモサピエンス以外に音声言語を操るヒト科の仲間は皆無である（鳥類はさえずりによつて類似した发声能力を持つが、ヒトとはかけ離れている）。チンパンジーは、DNA塙基配列ではヒトとわずかの違いしかないが、音声言語能力は持たない。チンパンジーは、声帯・喉頭が上がりすぎていて、口腔の共鳴空間が狭く、自由に音を出せない。面白いことに、人間の赤ちゃんも生まれた当初は喉頭が上部にあり、成長とともに下がる。声帯が下がり喉の空間が広がることで多数の母音や子音が出せるようになる（食物を喉に詰まらせて窒息する危険を代償に）。

ホモサピエンスの直系祖先であるクロマニヨン人は知性と社会性を持ち、言語能力を持つていたと推定されるが、それ以前のネアンデルタール人が音声言語を話していたかどうかは論争中である。脳容量は現代人と変わらず、しかもネアンデルタール人が絶滅した

のが約三万年前と推測されるが、三万年という時間は進化時計ではごく一瞬にすぎない。数万年という僅かの間に言語が獲得されたシナリオを描くのは難しい。進化における言語の系統起源がどこにあり、言語獲得への適応的機能は何だったのか？そこから言語突然変異説、言語本能説、社会学習説など諸説が生まれ、論争が激化する。もつとも今日では、様々な科学的間接証拠があるのに、もはや言語起源論をタブー視する理由は存在しない。

このように、言語学という一つの学問、言語という一つの研究対象において総合的アプローチが必要なことは明白になっている。またそれは、人間とは何か、人間はどこから来たのかといふ最大の謎に迫る知的探求と結びついているのである。